

# 旅 と 観 光

更 科 源 三・郷土史研究家・原文のまま

最近の新聞に井上靖さんが『旅行は好きな方でよく旅行するが、旅情を感じずることは、めったになくなった。昔は、北海道まで旅行すれば、誰でも否応なしに遠いところへやって来たという感慨はあったに違いない。併し、今日飛行機に乗れば千歳まで一時間足らずで行ける。くるまの時間を入れても三時間ほどで、東京の都心から札幌まで運ばれる。札幌からまた飛行機を使えば、いわゆる涯果ての網走まで一時間半程である。こうなると、涯果ても何もあったものでない』と述べている。それは、旅情を作りだす要素の遠隔感がなくなったからだと言い、そして『人間は旅情が欲しいのである。旅情を感じられる旅がしたいのである』と述べている。

私はその文章を読んでいて、いつか山崎春雄先生の、御子息がヒマラヤ遠征に出かけられるとき、飛行機で行くということをかきかかれて、『莫迦だな、そんなら地図を見ているのと何のかわりもないじゃないか』といっていたのを思いだした。

この頃は飛行機で観光旅行をするのを、デ・ラックス旅行といって、今朝の新聞にも交通事情視察と称して、警察官が飛行機で北海道旅行をしたいといって、問題を起したという記事があった。飛行機利用ということが、この頃ではデ・ラックスであるかのように考へられているようである。それは飛行機が高いということと、早いということにあるようであるが、私はこと旅に関しては、山崎先生と同じように、飛行機をつかうほど莫迦莫迦しいことはないと思う。だから井上さんのいうように旅情のない観光というものは、少くとも旅というものではない。私は今日の最もデラックスな旅は二等の鈍行に乗って、風の吹くまゝ、気のむくまゝに移って行く旅であると思う。

もう四、五年になるが、京都から鈍行に乗って北陸路を汽車旅行したことがある。私の隣に乗り合わせる人は一日のうちに、何十人か入かわり立ちかわり移っていった。ずるそうな商人が『儲け、儲け』と金の鬼になったような話をしていたと思うと、解き難い宿題と真剣に取組む静かな女子高校生がそのあとに座ったり、県境に行くとき車内の客がまばらになり、トンネルを越すと、山の匂いのするような人達や、土によごれた着物を着換えもせずに乗って来た人達が、山の中や田圃の畔での話

のつづきを、声高に話し合い、そそくさと乗り降りして行く。私はそのどの人とも一言も話を交すことなしに、その人達の言葉をききながら、もう生涯あうことのないだろうその人々の後姿を見送るのだった。その人達の言葉は、朝に聞えていた関西のやわらかく、物静けさが、いつとはなしに少しくらく沈んだ北陸なまりになり、ひるが過ぎ、夕方になると昔父達が使っていたなつかしい越後弁になった。旅というものは車窓の風物や、土地のめづらしい文物を見るということだけが、一般に意識されているが、本当は旅のよきは行きづりにふれる人間同志の、気づかないようなふれ合いにあるのだと私は思う。ふと隣りに座った人のたたづまいや、目の色だとか言葉のはしに、ハッと何かに強くうたれることがある。それが旅情というものではないだろうか。こんな今日の観光旅行には葉にしたくもない。だから観光旅行と旅とはちがうと私はいいたいのである。

いつか九州を歩いたとき私は意識して、いわゆる観光地というところをさけて歩いた。観光地と名のつくところでは、道条の関係で雲仙だけを通してみた。そこ見た土産物まで北海道のものと同じで、阿寒と書くところへ、雲仙という字が入っているのと、アイヌと熊物が無いのが唯一の相異で、言葉までが同じで、何のためにわいわいと人が集るのか、全く理解できなかった。有名だからバスに乗せられたから来た、皆そんな顔をして右往左往していた。

こうした姿は今や九州も北海道も、印で押したように同じである。それは観光業者と観光客とだけのなれ合いの感じすらする。この間の土曜日に、わざと混合ふ層雲峡へ行ってみた。多くの団体客で旅館はいづれもはちきれるばかり、女中さんたちは重労働者並みで、とてもサービスなんてやりたくともできるものではない。こんなところへ来てサービスが悪いなんて言う人間がいたら、よほどの冷血漢である。大体宿の客になると殿様にでもなったように、我俣に振舞うものだと思って、無闇にあれもしろ、これもしろという連中がいる。おそらくこんなのは家では何もしてもらへない位置にいる連中であろう。旅のときだけせめて翼をのばしたいのかもしれない。女だけの団体も入って大宴会をしていたが、立派らしい奥さんが大虎になって、二人にかかへられて、わめ

きながら廊下一ぱいに歩いているのもあった。これまでは女性の人の旅が少なかったのでやはり、筆をはなれた鳥なのであろう。

よく若い人達に

『北海道の何処へ行ったらいいですか』

ときかれる。

『どんところが好きですか』

と私はきき返す。すると大低は

『人のいないところ』と答える。

この頃はあまりに人が多すぎる。人間の居ないところをさがして旅をする若者が多くなった。何だか不幸な気がする。私は観行旅行をする人に、

『観光地はひるの間にみて、泊るときは必ず観光地を離れて宿をとりなさい』

とすすめる。そこには重労働の女中さんたちもいないし、無理やり山の中へ海のものをもってきて、都会風の料理をつくってゴッソリというところを軽くさせられることもない。宿のおかみさんのしなびた手料理をたべ、茶間へ行くと話好きのおやじさんが、大きな胡坐をかいてめづらしい話で夜のふけるのを忘れさせてくれる。

本州の観光地には名所古跡というのが多い、行ってみるとつまらない石塊が一つころがっていても、それが歴史上の有名な話につながっていると、それは何等かの観光資金源になる。

『金色夜叉』お宮の松などという、不思議なものまでが観光資源になるから、たまげたものである。ところが北海道にはそれがない。観光資源としてあるのは自然だけである。国立公園、国定公園、道立公園だけである。これだけでは説明にこまるので『恋マリモ』だの悲恋何とかという、ありもしない創作伝説をつくって、これはアイヌのものでございますと、バスガールに物語らせる。きかされる方でも心得たもので、昨夜の飲みつかれで、うつらうつらと、風景も伝説もあったものでないのである。

いつかテレビの『茶間の科学』か何かで、戸塚文字さんと出演したことがあるが、それがオホーツク海岸の原生花園のことであった。戸塚さんは花園がすっかり荒されたことを嘆いて、

『もう私達よいところがあっても、黙っていましうよ、こんなに荒されるんだから』

と言った。

私も賛成だったが意地悪く

『私達を書かないと、あの人達はよく歩くのに、まだこんなところのあることを知らないと書かれますよ』

といって笑った。

たしかに北海道の自然は年々荒廃していつている。阿寒の横断道路までが、昔の面影がなく荒れていくのは、何処が悪いのか。たしかに道はよくなって、東京からの往復が飛行機になったように、ここもスピードが早くなった。然し、そのためにあたりの樹木が押し倒され、枯らされ、あたかも台風が過ぎたあとの様になった。総合開発という我々の耳ようになってから久しい。開発されるたびに自然がこわされて行くの仕方あるまい。然し自然を生命線にしている北海道の観光事業というものが、あるのかないのかよくわからないが、もしあるとしたならば、もう少し自然を大事にすることを、総合開発の中に入れてほしいものである。

スピードを増すために、高空を一気に飛ぶのと同じように羊腸とした展望のきく坂道をさけて、谷間から谷間へトンネルをつくって弾丸道路を作ることも、北海道の自然を紹介することではなくて、温泉から温泉へ客を運ぶだけの旅館とバス会社だけの総合開発で、北海道の本当の紹介ではないようだ。私は旅をするたび必ずどこか横道を探して、本道からそれて入って見る。そこには戦場のような砂煙がなく、腹の底までひやりとする静かな浄らかな空気がある。生活のために踏み分けられた、自然の細道の陰翳がある。小鳥だとか昆虫などの世界もある。都会の仕事場で忘れていた別な世界が限りなくひらけているのである。私は観光地に行っても必ず観光客の行く反対の方へ道をたどる。観光地というものはあまりに近すぎる。いや都会のいやらしさと同質にすることが、観光事業だとすら思っているかのように思うのは、私のすねた見方であろうか。観光地の反対の方に本当の北海道の姿がひっそりと息づいているように思う。

若い人々が少し無謀に近く山へ山へとあこがれるのも観光地の都会化の罪もなしとはしないだろう。